弥生人と日本語の形成
－日本語南方系縄文人語起源説－

藤井游惟

１．　北方系説と南方系説

従来の日本語起源論・系統論は、きわめて乱暴に割り切ってしまうと北方系説と南方系説の二派に大別される

北方系説：ウラルアルタイ語系説・弥生人語説

2300 年前に海外（朝鮮半島）から稲作・金属器文明を携えて日本列島に渡来して来た弥生人の祖先達が話していたのが日本語

南方系説：オーストロアジア語説・縄文人語説

弥生時代開始以前から日本列島に住んでいた縄文人が話していた言語が日本語

●北方系説は「アメリカモデル」を念頭に置いている

15 世紀に北米大陸に新天地を見つけたヨーロッパ人は、続々と移民を送り込み、移民達は先住民を暴力的に駆逐して支配地を広げ、人口を増やしていった。その移民達の話していた言語が英語である。その証拠に大西洋の対岸のグレートブリテン島には現在でも同じ言語を話す民族がおり、遺伝子的にも両者は近い。

・・・紀元前３世紀に日本列島という新天地を見つけた朝鮮半島・大陸の人間は、続々と移民を送り込み、先住民たる縄文人を暴力的に駆逐して支配地を広げ、人口を増やしていった。この移民達の話していた言語が日本語である。

・・・・ところが、移民を送り込んだはずの半島・大陸側の住民は、遺伝私的には列島住民との近縁関係を示すのに、日本語と近縁関係にある言語を話す民族はいない

・・・・さらに不思議なことに、日本列島の遙か南にあり、近年に至るまで本土とは殆ど人的交流が無く、遺伝子的にもかなり異なる琉球列島の住民のみが、日本語と近縁関係を示す言語を話している

アメリカモデルでは説明がつかない

２．日本語と朝鮮語は同系言語ではない

比較言語学（歴史言語学）

複数の言語を比較して、その近縁関係の有無を考察する学問

・近縁関係の決め手となるのは

「基礎語彙の音韻対応（Phoneme correspondence）」

食べる・飲む・行く・来る・・・といった幼児が真っ先に覚え、一生使い続ける基礎的な単語は、長い年月を経ても余り変化しない

essen（独）：eat（英）　tirinken（独）：drink（英）

gehen（独）：go（英）　kommen（独）：come（英）

ドイツ語と英語が近縁関係にあることがわかる

日本語と朝鮮語その他のアルタイ系言語とは

基礎語彙の音韻対応がみられない

クウ（日）：먹다　/mokta/（朝）

ノム（日）：마시다 /mashida/（朝）

イク（日）：가다 /kada/（朝）

クル（日）：오다 /oda/（朝）

日本語と琉球語は明確に音韻対応している

クウ（日）：カヌン /ka=nuN/　（琉）

ノム（日）：ヌヌン /nu=nuN/　（琉）

イク（日）：イチュン（日）　/icuN/　（琉）

クル（日）：チューン /cuuN/　（琉）

・文法の類似は近縁関係の証明にはならない

中国語と英語の文法はよく似ている

拙著「白村江敗戦と上代特殊仮名遣い」は

言語的な日朝同系説を否定するもの

「上代特殊仮名遣い」は日本語と朝鮮語の関係が

1300 年前から殆ど変わっていないことの証明

３．　琉球語の不思議

日本本土と琉球の間には、明治に至るまで、言語が変化するほどの濃密な人的交流はなかった

・遺伝子的に琉球人は本土日本人と異なる

琉球人には、朝鮮人などと共通する

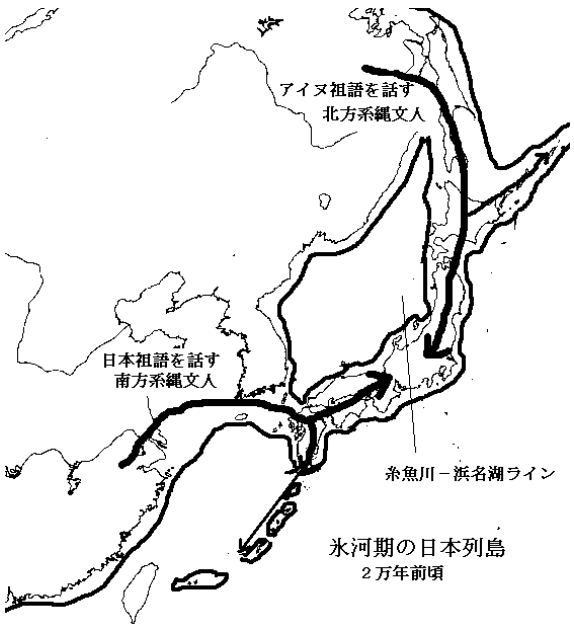
北方系モンゴロイドの遺伝子は殆ど入っていない

・・縄文人の直系子孫

琉球は 12 世紀に至るまで「考古学時代」

・ヴュルム氷期、日本列島が大陸と地続きであった時代に琉球人の祖先は琉球に住み着いた。

・琉球諸島は九州とはつながっていなかったが、薩南諸島（種子島・屋久島等）は九州につながっており、琉球人の祖先達は、そこからもっと大きな島で、相互に観望できるトカラ列島・奄美諸島・中琉球諸島（沖縄本島周辺）を飛び石の様に渡って琉球諸島に住み着いたものと思われる。（台湾側から北上したことは遺伝子的に否定されている）



・32000 年前：山下洞人（１体女児：日本列島最古の人骨）
18000～20000 年前：港川人（９体）
12000 年前：上部港川人（３体）
上部上川人は本土縄文人と類似した形質を持つ
・12000 年前頃、氷河期の終結により、琉球は薩南半島と遠く離れて孤島化
（縄文中期まで人跡の絶える時期が何千年かあったとされ、氷河期に住み着いた人類は一旦滅亡し、縄文中期に本土縄文人が移住した可能性もある）
・その後の琉球人骨は、紀元５世紀頃まで
殆ど変化がみられない
・・本土で起こった縄文人と弥生人の交代は
琉球には全く影響を及ぼしていない
・５～12 世紀までの間に、琉球人骨は緩慢に変化
外来の遺伝子が混じってゆく
但し、外来遺伝子をもたらしたのは、
本土日本人とは限らない
中国人や朝鮮人も琉球に出没していた
（中国の晋代の貨幣が複数出土）
・12 世紀になって、琉球にも稲作がもたらされ
人口が増え、階級分化が進んで「グスク時代」が始まる
但し、琉球に稲作をもたらしたのも
本土日本人とは限らない
「グスク」のような石積み方式は日本本土にはなく、
朝鮮にある方式
・グスクから福建人とおぼしき中国人の骨が発掘
・12 世紀に、沖縄本島に北山・中山・南山という
「三山王朝」が成立
・14 世紀に中山王朝「尚氏」が三山を統一
明から「琉球王」の柵封を受ける
・中山王朝は、日本本土との貿易も行い、
留学生を送って日本の「ひらがな」を輸入
1531 から「おもろさうし」の編纂がはじまる
書かれているのは中国語ではなく「琉球語（日本語）」
・一方、中国にも留学生を送ったり、学者を招聘したりして、
漢字文化も輸入
・・・中国から来た学者の中には国に帰らず「客家」とし
琉球に永住する者もいた
・1609 年、薩摩島津藩が 3000 の兵を以て琉球に侵攻
奄美諸島を割譲させ、琉球王国を間接統治
・・・・史上初の本土日本人と琉球人の大規模交流
しかし、これ以前から琉球人は琉球語を話していた
・以後、江戸時代を通じて琉球は薩摩藩の支配下にあったが、
琉球に「在番奉行」として常時駐在していた薩摩藩士は
単身赴任の 10 数名・・言語に変化をもたらす数ではない
・明治維新後、1975 年に琉球は正式に日本に編入される

琉球人はいつから琉球語（日本語）を話すようになったのか？
・・・氷河期に琉球に初めて人が住み着いた時から

弥生人の子孫である本土日本人と、縄文人の直系子孫の琉球人が同系言語を話しているのは何故か？

・氷河期に日本列島に住み着いた本土縄文人達も日本語を話しており、それが弥生人に「乗り移った」と考えるしかない

４．縄文人には二系統あった

BC３～５世紀の弥生時代開始以前、日本列島に住んでいた先住民である「縄文人」には二系統あったと考えられる。
即ち
・アイヌ（祖）語を話す北方系縄文人
・日本（祖）語を話す南方系縄文人
その居住境界線が「糸魚川－浜名湖線」（糸浜線）
・両者は、大陸と地続きだった氷河期に、日本半島に入ってきて広がり、氷河期の終了とともに日本列島に取り残された
・「糸魚川-浜名湖線」
民俗学・方言学などでいう「東西文化境界線」
この線を境にして方言や文化ががらりと変わる
言語学的に注目されるのは、アイヌ語起源と思われる地名はこの線の東側に集中していること
「サワ（沢）」のつく地名は、糸浜線以東北海道まで
「イガラシ（五十嵐）」「タツコ（立子）」などのアイヌ語と思われる地名も糸浜線以東に集中
・「糸魚川-静岡構造線」
地質学でいう「フォッサマグナ」の西端
日本海側では「親不知の険」から続く険しい山岳地帯が東西の交通を遮断
太平洋側ではそれほどの地理的障害はなく、
北方系がやや西まで進出
植物学ではフォッサマグナの東にしか生えない
「フォッサマグナ要素」と呼ばれる植物がある
・原始時代、この線の東西では植生が異なり、
生態系も異なっていたと考えられる

５．言語乗り移り現象

一定の社会状況においては、外部から侵入してきて
先住民を駆逐した征服民に、先住民の言語が「乗り移る」
という現象が起こる
・アフリカのンゴニ（Ngoni）族の事例
19 世紀半ば、南西アフリカのマラウィ湖周辺に、先住民を駆逐して住みついたンゴニ族は、それよりも 1000 km近く南の南アフリカ共和国に住むズールー（Zulu）族の一部族であり、現在もズールーの伝統文化を守っている
ところが、話す言語はズールー語ではなく、駆逐したはずの先住民言語であるトゥンブカ語を基礎にしたンゴニ語を話している。（ズールー語とトゥンブカ語は別系統言語）
19 世紀初頭、南アフリカで広義のズールー諸部族が、南部・北部の二つの同盟に分かれた統一戦争が起き、南部にシャカ・ズールーという英雄が現れてこの戦争に勝利し、ズールー王国を樹立。（民族全体がズールーと呼ばれるようになったのはこの時から）
・ンゴニ族の祖先は、この統一戦争に敗れ、故郷を棄て、安住の地を求めて北上した北部同盟の敗残兵である。

言語乗り移りのメカニズム

・「敗残兵」の群れであるから、当然男ばかり（女がいたとしても少数）
・子孫を残そうとすれば、先住民の女を捕まえるしかない
・先住民を駆逐する際、男は皆殺し、女は捕まえて戦利品として分配
・先住民の女は子供（混血児）を生む
・子供を育てるのは母親の仕事であり、混血児達は接触時間の長い母親の言語（先住民語）をいち早く受け継ぐ
　「家庭内で父親と母親の言語が異なる場合、
　子供は接触時間の長い母親の言語を強く受け継ぐ」
　・・・・強固な言語社会学的法則
・同時期に生まれた混血児達は、子供同士のつき合いの中で、先住民語により磨きをかける
　「家庭内の言語と社会の言語が異なる場合、
　子供は社会の言語に強く染まる」
　・・・・強固な言語社会学的法則
・こうして人口が増え、占領地が手狭になると、また隣の先住民を襲って、男は皆殺し、女は捕まえて分配・・・ということを繰り返し、先住民語を得意とする混血児がどんどん拡大再生産される
・初代の混血児達は、ズール一語と先住民語のバイリンガルに育ったかもしれないが、父親達が死んでしまうと、ズール一語を使う必要はなくなる
・こうして世代交代が進むと、ズール一語の方が消え、ズール一の伝統文化を継承しながら、話す言語は先住民語、という部族ができあがった
・ンゴニ語には、ズール一語起源の語彙が多数混じっているが、基本は先住民のトゥンブカ語である。

「弥生人」の祖先となった渡来人は男ばかりでやってきた

前近代、未開の土地の開拓は、最初は男だけが行く。
　・・・アメリカ・オーストラリアなどの例
開拓が軌道にのり、女子供を連れて移住できるようになるまでには、必ず数十年のタイムラグがある
　・・英領アメリカへ初めて女性が渡ったのは
　　開拓開始40年後
・紀元前３～５世紀に朝鮮海峡を渡ることは、16世紀に大西洋を渡るのと同じぐらい困難だったはず
・渡来人達は男ばかりでやってきて、縄文人集落に襲いかかり、男は皆殺し、女は捕まえて戦利品として分配し、慰み者にする・・・縄文人語の方が得意な混血児が生まれる
・渡来人と縄文人の女で開拓が始まるが、８～10年もすると混血児達も成長して労働力となる
・15～16年も経つと、渡来人と混血児、混血児同士の結婚　も始まり、縄文人語の方が得意な混血児が益々拡大再生産される。
・ 開拓開始から30～50年も経ち、占領地経営が軌道に乗って、家族連れの渡来人が入ってくるころには、縄文人語を話す混血児が圧倒的に増えてしまっていた

６．弥生人の人口爆発は自然増

「アメリカモデル」で日本語の形成を説明しようとする北方系説論者は、渡来人の「一挙大量移住」「続々追加移住」という、これも「アメリカモデル」で弥生人の人口増を説明しようとする。

しかし、弥生人の人口爆発は日本列島内での自然増の方が圧倒的に多かったはずである。

縄文時代の人口

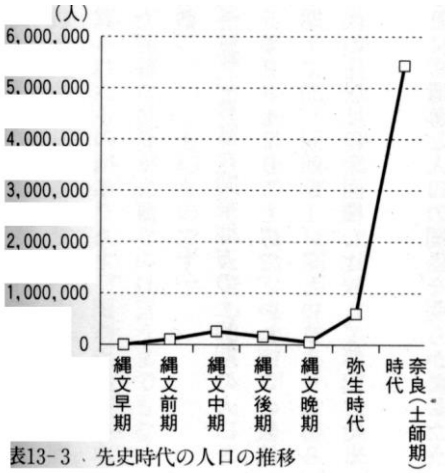


表13-3　先史時代の人口の推移

	早期	前期	中期	後期	晩期	弥生	土師
東北	2,000 (0.03)	19,200 (0.29)	46,700 (0.70)	43,800 (0.65)	39,500 (0.59)	33,400 (0.50)	288,600 (4.31)
関東	9,700 (0.30)	42,800 (1.34)	95,400 (2.98)	51,600 (1.61)	7,700 (0.24)	99,000 (3.09)	943,300 (29.48)
北陸	400 (0.02)	4,200 (0.17)	24,600 (0.98)	15,700 (0.63)	5,100 (0.20)	20,700 (0.83)	491,800 (19.67)
中部	3,000 (0.10)	25,300 (0.84)	71,900 (2.40)	22,000 (0.73)	6,000 (0.20)	84,200 (2.81)	289,700 (9.66)
東海	2,200 (0.16)	5,000 (0.36)	13,200 (0.94)	7,600 (0.54)	6,600 (0.47)	55,300 (3.95)	298,700 (21.34)
近畿	300 (0.01)	1,700 (0.05)	2,800 (0.09)	4,400 (0.14)	2,100 (0.07)	108,300 (3.38)	1,217,300 (38.04)
中国	400 (0.01)	1,300 (0.04)	1,200 (0.04)	2,400 (0.07)	2,000 (0.06)	58,800 (1.84)	839,400 (26.23)
四国	200 (0.01)	400 (0.02)	200 (0.01)	2,700 (0.14)	500 (0.03)	30,100 (1.58)	320,600 (16.87)
九州	1,900 (0.05)	5,600 (0.13)	5,300 (0.13)	10,100 (0.24)	6,300 (0.15)	105,100 (2.50)	710,400 (16.91)
全国	20,100 (0.07)	105,500 (0.36)	261,300 (0.89)	160,300 (0.55)	75,800 (0.26)	594,900 (2.03)	5,399,800 (18.43)

表13-2　先史時代の人口と人口密度（カッコ内は人口密度）〈小山教授作成〉

国立民族博物館の小山修三氏の推計
　発掘された集落跡の規模、集落間の距離等から
　人口を推計

・縄文時代中期（縄文海進期）：26万人強
・縄文時代晩期（弥生時代開始期）：7.5万人
・東日本の方が西日本より人口が多かった

小山説の問題点・・考古学的方法の限界

・各時代・各地域の集落跡が全て発掘されているわけではない

・・・現在利用されている土地では発掘はできない

・狩猟採集民は季節によって居住地を変えるのが普通であり、近隣に複数の集落跡があったからといって、そこに常に人が住んでいたとは限らない

・温暖な西日本の方が、寒冷な東日本より人口が少なかったとは考えられない

・・・西日本で縄文人遺跡が殆ど発掘されないのは弥生人が町や田畑に変えてしまったから

・・・東日本（特に関東地方）で縄文人遺跡が良く保存されているのは「縄文海進」の影響

●狩猟採集段階の人類の人口は非常に少ない

穀物がなく、狩猟採集で 100 人の人口を養うとしたら

必要熱量

１日１人当　　：3000 Cal

１日 100 人当　　：300000 Cal

年間１人当　　： 1095000 Cal

年間 100 人当　：109500000 Cal

品目	100g当熱量(Cal)	個体可食部重量(g)	個体熱量(Cal)	一日必要個体数	年間必要個体数
米	350			85.7Kg	31.3 ﾄﾝ
麦	350			85.7Kg	31.3 ﾄﾝ
ジャガイモ	78	200	156	1923 個	701923 個
里芋	58	80	46.4	6465 個	2359913 個
栗	164	20	32.8	9146 個	3338414 個
うるめいわし	136	100	136	2205 匹	805147 匹
鯉	171	1500	2565	117 匹	42690 匹
豚(トータル)	250	40000	100000	3 頭	1095 頭
豚(脂身付)	216				
豚(赤身)	125				
豚(脂)	704				
イノシシ肉(脂身付)	268				

現代の 10 ｱｰﾙ当たり収穫量

米：約 500 kg　　小麦：約 250 kg

必要収穫量	10 ｱｰﾙ当収穫量	必要水田面積	水田一片
31.3 ﾄﾝ	500kg	6.3 ﾍｸﾀｰﾙ	250m四方
31.3 ﾄﾝ	250kg	12.5 ﾍｸﾀｰﾙ	354m四方
31.3 ﾄﾝ	150kg	20.9 ﾍｸﾀｰﾙ	457m四方
31.3 ﾄﾝ	100kg	31.3 ﾍｸﾀｰﾙ	559m四方

単位面積収穫量が現代の 1/5 だとしても､559m四方の水田があれば、米だけで 100 人の人口を養える。

縄文時代の人口推計

九州島の面積：約４万平方km

５万人が 50 人ずつ 1000 の集落に別れて住んでいたら

１集落の縄張り４平方km（6.6 km四方）

日本列島の面積：約 37 万平方km（九州の約９倍）

寒冷な東・北日本の人口は九州ほど多くないとして

約 30 万～40 万程度？

縄文海進の時代は 50～70 万程度？

日本列島は稲作農業に適していた

米の単位面積収穫量は小麦のほぼ２倍であるが、

栽培には大量の水を必要とするのが欠点

朝鮮半島の年間平均降水量

ソウル：1344 ㎜　　釜山：1491 ㎜

大邱：1028 ㎜　　大田：1353 ㎜

光州：1368 ㎜　　平壌：951 ㎜

中国の年間平均降水量

山東半島・青島：710 ㎜　煙台：790 ㎜

遼東半島・大連：601 ㎜　北京：575 ㎜

日本列島の平均降水量：1800 ㎜

福岡市：1600 ㎜　大分市：1680 ㎜　長崎市：1678 ㎜

佐賀市：1800 ㎜　熊本市：1800 ㎜

宮崎市：2000 ㎜以上　鹿児島市：2000 ㎜以上

渡来人達は稲作農業と共に金属器文明をも携えてきた

金属器が無ければ本格的な農業は出来ない

木器・骨器・石器・土器だけでは

木一本切り倒す、穴１つ掘るのも困難

●稲作農業により弥生人は急激に増殖した

ハッテライト指数（Hutterite Index）

「ハッテライト」というのはオーストリアで起こった

近代文明を忌避するキリスト教のカルト集団。

19 世紀に 400 人が北米に移住してコロニーを作ったが、

以後 125 年間で人口が 42000 人まで増えた。

人口学や産科医学で避妊をしない場合の人口増加の実

例として屡々取り上げられる。

ハッテライト集団では、この 125 年間に１人の女が平均 10.5 人の子供を産んでいた。

人口増試算

１世代 30 年とし、女性 100 人、１人の女が平均 4.46 人の成人する子供を生めば､社会増（外からの移民）が全くなくても、10 世代、300 年後には人口 60 万人を越える。

非成人率（幼児・児童死亡率）が 50%あったとしても、十分ハッテライト指数の範囲内

年後	30	60	90	120	150
人口	446	995	2218	4946	11029
倍率	2.2	5.0	11	25	55

年後	180	210	240	270	300
人口	24596	54848	122312	272756	608245
倍率	123	274	612	1364	4041

・弥生時代の開始となった渡来人の流入は、せいぜい数十人～百数十人程度で、男ばかりでやってきた。

・男達は、先住の縄文人を駆逐する際に、女を捕まえて慰み者にし、子供を産ませる。それが初代の「弥生人」である、その

混血児達は母親の縄文人語（日本語）の方が得意になってしまう。

・初代の弥生人達はバイリンガルに育ったかもしれないが、稲作農業による弥生人の増殖は急激であり、第二世代になると渡来人達と殆ど接することなく、縄文人語（日本語）モノリンガルの者が急激に増加する。

・最初の占領地の人口が増え、手狭になると、渡来人・弥生人達は近隣の縄文人集落を襲って、男は皆殺し、女は捕まえて分配、ということを繰り返して、弥生人の支配領域はどんどん奥地に広がっていく。

（弥生人の人口が縄文人より多くなると、男も皆殺しにはせず、捕まえて半島に奴隷として輸出し、必要な物資を輸入する様になる）

・このようにして、移住開始後、数十年の間に、生産性の高い稲作農業によって、日本語の方が得意な混血児が急激に増殖し、渡来人達は政治的には優位でも人口的にマイノリティーとなり、渡来人言語の方が消え去ってしまう。

７．方言境界線の起源

方言学では、

①糸魚川ー浜松ライン（糸浜線）

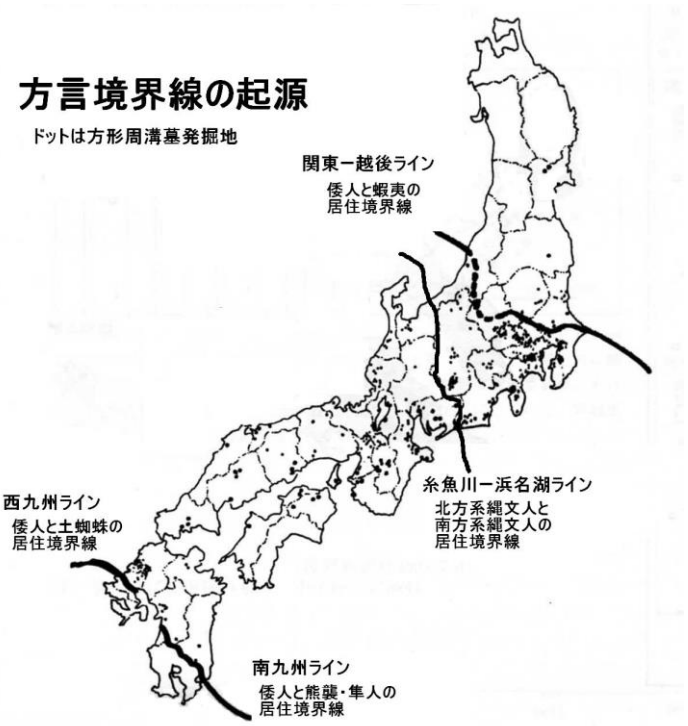
②関東-越後ライン（関越線）

③南九州ライン

④西九州ライン

などの大きな方言境界線が知られている。

これらの起源は、紀元前３～５世紀の弥生時代開始から、８世紀以降の律令制中央集権国家成立までの、倭人（弥生人）と、南北縄文人との歴史的関係で説明が付く。



①糸魚川ー浜松ライン（糸浜線）
南方系縄文人と北方系縄文人の居住境界線

紀元前３～５世紀に渡来人が侵入してきて、日本（祖）語を話す南方系縄文人を駆逐しつつ同化して形成された日本語を話す「弥生人」は、稲作農業によって急激に人口を増やし、100～300 年後にはそのフロンティアは糸魚川ー浜名湖ラインを越えてアイヌ(祖)語を話す北方系縄文人の居住地域に侵入する。

その頃には、弥生人の人口の方が多く、占領が終わればすぐに家族連れの移民が入ってくるため、男は皆殺し（或いは捕まえて奴隷として売る)、女は捕まえて慰み者にということを行っても、「言語乗り移り現象」は起こらない。

しかし、地名・動植物名などにアイヌ語の影響がのこり、また捕まえた北方系縄文人達の話す「変な日本語」の影響で、発音やアクセント、文法などにも変化が起こる。

②関東ー越後ライン（関越線）
倭人（弥生人）と蝦夷の居住境界線

弥生人（倭人）のフロンティアは紀元１世紀に関東-越後ラインまで到達するが、それ以上は北上しなかった。

当時の稲作技術はこのあたりが北限であり、余り実りが良くなく、人口もそれほど増えなかったのであろう。

以後、この線を挟んで倭人と蝦夷の平和共存は８世紀の奈良時代まで続く。（７世紀までに東の方では福島南部あたりまでは北上）

③南九州ライン
倭人（弥生人）と「熊襲・隼人」の居住境界線

紀元前３～５世紀に形成された「弥生人」達は、何故か南九州（ほぼ鹿児島県）には侵入せず（侵入出来ず)、ここには縄文人の直系子孫がかなり遅くまで残された。

それが「熊襲・隼人」と呼ばれる人々であり、彼らが倭人の間接統治下に入るのは紀元５世紀頃、直接統治下に入るのは８世紀の奈良時代に入ってからである。

熊蘇・隼人は元々日本語を話していたが、常に半島・大陸と交流のある弥生人達の日本語は、中国語や朝鮮語の影響で急激に変化してゆくため（特に語彙面)、倭人の直接統治下に入るまでの 800～1000 年の間に大きな方言差が生じていた。

④西九州ライン
倭人（弥生人）と「土蜘蛛」の居住境界線

「肥前風土記」によれば、景行天皇の頃、長崎県の彼杵半島に朝廷にまつろわない「土蜘蛛」と呼ばれる人々がいたとされ、また同時代にはこの地域に「熊蘇と似た言語を話す人々がいる」とされている。

この「土蜘蛛」も「熊蘇・隼人」と同じく、辺境にあったが故に、倭人（弥生人）との「暴力的同化」を免れた南方系縄文人の直系子孫であったと考えられ、４世紀の倭王朝成立以降、倭人の政治的支配下に入ったが、８世紀の律令制施行の頃には、まだ文化的・言語的には倭人に同化していなかったものと見られる。

済洲島原住民語

さらに、「魏志三韓伝」が記す済洲島原住民も日本（祖）語

を話す南方系縄文人の直系子孫であったと思われる。

ただ、済洲島は九州よりも朝鮮半島に近かったため、原住民は後に朝鮮人に同化された。

琉球語とアイヌ語

そして、辺境にあったが故に、明治に至るまで、倭人（弥生人）との「暴力的同化」を免れ得た南方系縄文人の直系子孫が琉球人、北方系縄文人の直系子孫が北海道アイヌである。

８．東北方言はクレオール日本語

８世紀の律令制国家「日本」の成立時に、日本列島内には、南九州に「隼人（熊襲）」、東北地方に「蝦夷」という異民族がいた。

４世紀に成立した倭王朝（大和朝廷）は、熊襲・蝦夷を間接的支配下に置いたが、彼らの大幅な自治権を認めていた。

しかし、日本王朝は、熊襲・蝦夷の自治権を認めず、中央から派遣された国司の支配下に入り、倭人文化に同化することを強要したため、当然の如く両者の反発・反乱を招き、政府はこれを武力で強引に鎮圧しようとする。

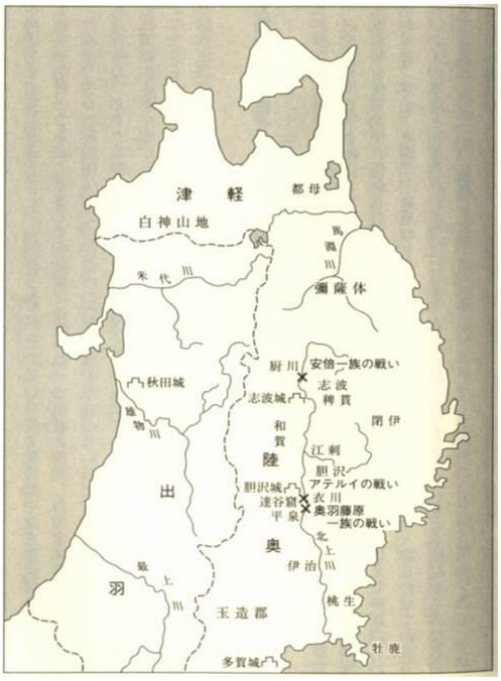
しかし、南九州の隼人は、721 年の最大にして最後の反乱を大伴旅人によって鎮圧されて以降、二度と反乱は起こさず、短時日のうちに律令体制に組み込まれ、倭人文化に同化してゆく。それは、倭人と隼人との間にはひどい方言差はあっても言語が通じたからである。

明治維新以降、強引に日本に編入された琉球王国の人々が短時日のうちに本土日本人と同化できたのも同じ理由である。

それに対し、中央政府は東北地方の蝦夷の反乱の鎮圧、文化的同化には非常に手こずる。それは、蝦夷は倭人にとって言語の通じない全くの異民族だったからである。

蝦夷の征服・同化過程

708 年：庄内平野（山形県）に出羽柵を置いて出羽郡設置
711 年～720 年　陸奥南部の蝦夷と関東の倭人の入れ替え
724 年：多賀城（宮城県多賀城市）設置
733 年：出羽柵を秋田（秋田市）に北上
749 年：陸奥で砂金発見
758 年：桃生城（宮城県河北町）を造営
774 年：蝦夷が桃生城を攻撃、
以後 38 年間、陸奥は戦乱が続く
789 年：紀古佐美の５万大軍が、日高見国のアテルイに大敗
797 年：坂上田村麻呂が征夷大将軍
802 年：坂上田村麻呂にはアテルイを降伏させ、助命を約束して都に連行するが、朝廷はアテルイの首を刎ね、その後、日高見国滅亡。この際、日高見国の住民数万人が内地に連行され、奴卑として売られる。
（被差別部落の起源？）
811 年：文室綿麻呂の奏上により 38 年間の蝦夷征伐戦終了
その後、朝廷は、国司とは別に、陸奥に「陸奥鎮守府将軍」、出羽に「秋田城介」という軍事指揮官を置いて、蝦夷の監視に当たるが、蝦夷・俘囚（降伏した蝦夷）の反乱は頻発。



10 世紀末になると、朝廷は国司による蝦夷・俘囚の直接統治は諦め、安倍氏・清原氏などの蝦夷の血を引く豪族による間接統治に切り替える。

1051～1062　前九年の役　陸奥安倍氏滅亡
1083～1087　後三年の役　出羽清原氏滅亡
奥州藤原氏成立
1189 年　源頼朝により、奥州藤原氏滅亡
東北地方が完全に「倭人」の支配下に入ったと言えるのは律令制成立から 500 年も経ったこの時から

恐らく、鎌倉幕府成立以降も、倭人との接触が殆どない山間僻地に住む蝦夷たちは蝦夷語を話し続けていたはず
・・・蝦夷語話者が完全に消え去るのは江戸時代？

蝦夷の日本語への同化

弥生人のフロンティアが紀元１世紀に関東－越後ラインまで達した時、以北の蝦夷の人口は多くても２～３万人程度だったと思われるが、以後、関越線を挟んで倭人と蝦夷の平和共存が 700 年間続く間に、倭人の文明が蝦夷に伝わり、奈良時代には蝦夷の人口は 20 万以上にふくれあがっていた。

嵯峨天皇（在位 809～823 年）は、日高見国滅亡後も蝦夷討伐の継続を命じ（坂上田村麻呂・文屋綿麻呂の奏上で断念）、蝦夷の皆殺しを本気で考えていたようだが、皆殺しにするには人口が多すぎた。

日高見国滅亡以後、朝廷は東北地方に倭人の移住者を送り込み、蝦夷と倭人が同一社会で共存して、蝦夷語を話す蝦夷達が、徐々に日本語に同化してゆくが、このような社会状況の下では言語的な「クレオール化現象」が起こる。

ピジン語・クレオール語

ピジン語（pidgin language）：
現地人と貿易商人などの外国語を話す人々との間で異言語間の意志疎通のために発生する混成語。

狭義には、香港などの中国人がイギリス人と話す為に用いていたブロークンな英語「business English」が「pidgin」の語源

クレオール語（Créole language）：

ピジン語が広く使われる社会環境で育つと、ピジン語を母語として話す子供達が現れ、当該社会全体の共通語として広まる場合がある。この母語として話されるピジン語がクレオール語

Créole というのは、中南米の植民地生まれのヨーロッパ人、或いは人種を問わず中南米の植民地人のこと。

母語として話され、社会全体に広まった混成語が最初に確認されたのが、元フランス領ハイチの「ハイチ語」だったため、このような言語を「クレオール言語」と呼ぶようになった。

従って、狭義の「クレオール語」とはハイチ語のこと。

●クレオール語の語彙には、宗主国語と現地語の単語が混じるが、文法規則や音韻規則はそのどちらとも異なる「第三の言語」である。

（「ザ・シュートは、ラディカルなコンセプトで、ナウいサウンドをクリエイトするスーパーユニットである」　これは、外来語を多用しただけの日本語であり、ピジンでもクレオールでもない。一般言語学を全く勉強していない国語学者などには、このようなものをピジンやクレオールと混同している人間が多いので注意）

●母語として話されるクレオール語は「完全な言語」である

・・・当該言語を用いて表現できないことは何もない

現代英語（English）：11 世紀に、フランス語とゲルマン語が混じってできあがった、フランス語でもドイツ語でもない第三の言語である。

イングランドは、1067 年にフランスのノルマンジー公ギョームに征服され、多数のフランス人がイングランドに住むようになり、ゲルマン語を話していた民衆が、フランス語を耳コピすることによって、ゲルマン語でもフランス語でもない第三の言語ができあがった。

フランス語：紀元５世紀～９世紀、現在のフランスの領域に住んでいたガリア人、後に入ってきたゴート人などが、支配者であった西ローマ帝国のラテン語を耳コピで模倣することによってできあがったラテン語でも現地語でもでもない第三の言語である。

●ピジン語・クレオール語が発生する社会環境

① 植民地などに於いて、同一社会で異言語話者が共存し、日常的にコミュニケーションをとる必要があり、

② しかも「正しいA語」「正しいB語」を教える教育制度がない場合、

③ 現地人が政治的に宗主国人）の言語を耳コピで模倣することによって、まずピジン語が発生し、

④ 宗主国人が、ピジン語の文法や発音の誤りを訂正しないで放っておくと、現地人にはそれが定着してしまい、

⑤ やがて「変な宗主国語」を母語として話す世代が現れて、社会全体にその言語が広まってゆく

８～12 世紀の東北地方はまさに、蝦夷が日本語を耳コピで模倣することでクレオール語が発生する社会状況にあった。

東北方言は、クレオール言語の諸特徴を持っている

音韻面：

・常に母音が発音され、曖昧母音が多い

・・・ズーズー弁

文法面：

・センテンスが短く、文法が簡略

・命令形を多用する

語用面

・敬語がない

・男言葉と女言葉の区別がない

結論

このように、日本語は氷河期に日本列島（半島）に移り住んできて、糸魚川ー浜松以西に広がった南方系縄文人の言語であり、稲作・金属器文明を携えた渡来人が侵入してきて「弥生人」が形成される最初期に、その言語が弥生人達に乗り移り、生産性の高い稲作農業で爆発的に人口を増やした弥生人達が、異言語を話す北方系縄文人をも飲み込んでいった、と考えれば、考古学的・歴史学的・言語学的・方言学的様々な証拠・事実は全て矛盾なく説明できる。

なお、その南方系縄文人は、恐らくスンダランドから北上してきたものだと思われるが、この仮説を証明することは、現状においては困難である。

この仮説が正しければ、大野晋のタミル語説とも繋がる可能性がある。